23 女子修身教科書・女子の本分

昭和3年（1928）

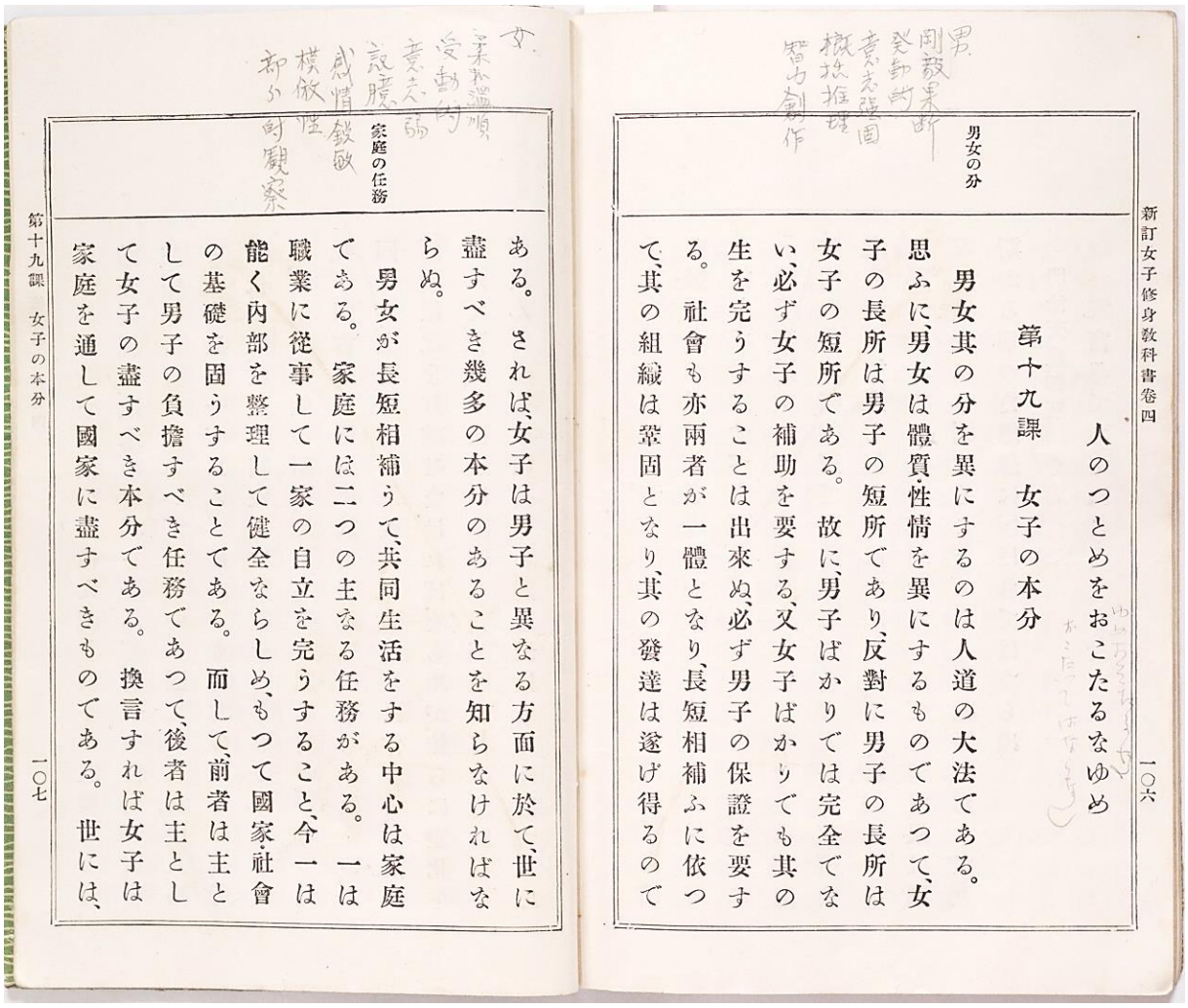
修身は道徳心を育み実践するための当時の学校の教科で、第二次世界大戦後に廃止されました。

女子最大の本分は「良妻賢母たるの実を挙げ、家庭の主婦となって、能く之を整理する」ことと書かれています。

また、欄外のメモ書きに「男、剛毅果断　発動的意志強固（略）女、柔和温順、受動的、意志弱（略）」との記載があります。

さらに、裏表紙の「沼田高女四学年黒岩まき」とあり、実際に群馬県立沼田高等女学校で使用されていたことがうかがわれます。

黒岩英夫家文書「新訂 女子修身教科書 巻四」(P8311 10383)



男女の分

人のつとめをおこたるなゆめ

第十九課　女子の本分

男女其の分を異にするのは人道の大法である。思ふに、男女は體質・性情を異にするものであつて、女子の長所は男子の短所であり、反對に男子の長所は女子の短所である。故に、男子ばかりでは完全でない、必ず女子の補助を要する、又女子ばかりでも其の生を完うすることは出來ぬ、必ず男子の保證を要する。社會も亦兩者が一體となり、長短相補ふに依つて、其の組織は鞏固となり、其の發達は遂げ得るので

家庭の任務

ある。されば、女子は男子と異なる方面に於て、世に盡すべき幾多の本分のあることを知らなければならぬ。

男女が長短相補うて、共同生活をする中心は家庭である。家庭には二つの主なる任務がある。一は職業に從事して一家の自立を完うすること、今一は能く内部を整理して健全ならしめ、もつて國家・社會の基礎を固うすることである。而して、前者は主として男子の負擔すべき任務であつて、後者は主として女子の盡すべき本分である。換言すれば女子は家庭を通して國家に盡すべきものである。世には、

男子の勇敢なる活動を偉大視し、女子の溫柔なる行動を蔑視し、歐米の皮相を學んで、女子の自由解放を主張するものがないでもない。固より、男女は人格としては同一である。けれども各其の天分の長所に依つて、家庭と國家とに貢獻すべきものであるから、決して、兩性の間に、尊卑・高下の別はない。隨つて、我が國古來の婦道に於て否認すべきものはない。固より、文明の進歩と社會の發達とに伴つて、舊來の陋習は、之を打破せなければならぬが、徒らに變化を喜んで、天地の公道に基づく我が國固有の美風をも傷はんとするのは甚しい誤と云はなければならぬ。

家庭の整理

家庭の整理は、主に妻として、嫁として、主婦として、母としての務を完うするに依りて成就する。即ち妻としては、貞淑・從順を以て夫に事へ、婦言を愼み、婦容を修め、婦德を積んで內助の功を擧げ、妻たるの品位を維持すべきである。又嫁としては、舅姑に事へては孝順であり、夫の兄弟・姉妹に對しては、實の兄弟・姉妹に對するが如くし、夫の親族に親み、家風を尊重し、一家春風の中心とならなければならぬ。更に主婦としては、勤勞を厭はず困難を避けず、能く家長を助けて婦功を擧げ、家族と和し、召使を憫み、一家經濟の主任となり、入るを計つて出づるを制し、以て家政

を整理し、家運長久の計を立てなければならぬ。而して、母となつては、一身を修養して子女の好模範となり、慈愛に溺れず、嚴酷に失せず、常に子女の將來を考へて、善良健全なる人物たらしめねばならぬ。最後に、老いて姑となつたならば、嫁を見ること猶ほ眞の子の如くし、同情を以て之に接すべきである。かやうに、良妻賢母たるの實を擧げ、家庭の主婦となつて、能く之を整理するのが、女子最大の本分である。

修養の必要

女子たるものが、能くこの重大なる本分を完うするには、必ずや修養を積み、知識を磨き、德行を修めねばならぬ。昔は、無學な女子でも、家庭の經營に苦しむことが少かつたけれども、今日のやうに世界の競爭が益激甚となり、人人の業務が愈繁劇を加ふるに至つては、安逸を貪る者は、到底生存を全うし得ない有樣となつた。隨つて家庭の整理についても、新しい知識と高尙な品性とを有する者でなければ、十分其の任に堪へることは出來ぬ。現代の女子にとつては、智德の修養は缺くべからざることである。

明治天皇御製

たゞしくも生ひしげらせよ敎草
をとこをみなの道を別ちて